

## 謝辞

本書は、創価学会版「法華経写本シリーズ10」として出版されるケンブリッジ大学図書館所蔵梵文法華経貝葉写本(Add. 1684)のローマ字版である。これまでに刊行されたものは以下のとおりである。

1. 『旅順博物館所蔵梵文法華経断簡——写真版及びローマ字版』1997年
- 2-1. 『ネパール国立公文書館所蔵梵文法華経写本(No. 4-21)——写真版』1998年
- 2-2, 3. 『ネパール国立公文書館所蔵梵文法華経写本(No. 4-21)——ローマ字版1および2』2001, 2004年
3. 『カーダリク(中国新疆ウイグル自治区)出土梵文法華経断簡』2000年
4. 『ケンブリッジ大学図書館所蔵梵文法華経写本(Add. 1682 および Add. 1683)——写真版』2002年
5. 『東京大学総合図書館所蔵梵文法華経写本(No. 414)——ローマ字版』2003年
6. 『ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部所蔵西夏文「妙法蓮華経」写真版(鳩摩羅什訳対照)』2005年
7. 『英国・アイルランド王立アジア協会所蔵梵文法華経写本(No. 6)——ローマ字版』2007年
8. 『パリ・アジア協会所蔵梵文法華経写本(No. 2)——ローマ字版』2008年
9. 『大英図書館所蔵梵文法華経写本(Or. 2204)——写真版』2009年

2011年には、シリーズの11として「大英図書館所蔵梵文法華経写本(Or. 2204)——ローマ字版」の刊行が予定されている。

筆者は、上記「シリーズ」の5, 7, 8 および 10 の作業を担当するという幸運に恵まれた。これはひとえに戸田宏文先生の学恩のおかげである。厚く感謝申し上げたい。筆者が取り組んだ作業の根底には、先生の「ネパール系写本のグループ分け」が可能であることを実証せんとする根本思想が一貫して流れている。

ローマ字化とは、単純な誤写をはじめとして、書写生の思い込みや文字の誤読による誤

写や、異なる解釈による異読の可能性が潜む写本の読みを、読解者がもう一度、頭をリセットして、「読む」という行為で、それらの是非を判断し、妥当と思われる読みを保つテキストを再構築する作業であると筆者は理解する。「この読みは正しい」「これは違う」と明確に判断できるものばかりではない。むしろ、書写生の意図を計りかね、やむを得ず読解者の主観的判断に委ねられるものの方が多く、重要度も高い。さらに、破損や磨滅によって、判読が困難な文字もある。敢えて判断をくたさずに、「そのママ」にローマ字表記しておく場合もある。すべてではないが「そのママ」とは、写本の現状を尊重する選択肢の結果として生まれるものである。過去の書写生達も、現在の読解者と同じように判断を保留したのかも知れない。名も姿も知らない、千年近い昔の人との対話がそこにある。安易な人は、この辺りの事情を推察しないで、うかつにも「そのママ」にローマ字化されていると診てしまう場合がある。

もちろん、今の読解者の判断が常にベストであるという保証もない。過去の書写生と同じような間違いや錯覚に陥って、誤読を重ねる危険性も皆無ではない。あるいは、新たな誤読を生み出しているかもしれない。今の読解者にできることは、より上質のものを目指すだけである。その意味で、21世紀に生きる筆者も、梵文法華經写本書写の長い伝統の末席に座す一人の「書写生」にすぎない。本書のローマ字テキストも、「法華經」という名の梵文テキストに書き込まれた、現在の書写生の一つの解釈であり、一つの写本にすぎない。ただ一つ自信を持てることは、現在の書写生は、過去の書写生よりもはるかに大量のデータを扱うことができるということだけである。

さて、結局、「ネパール系写本のグループ分け」は可能なのか、否か？「序」の4つのサンプルとともに、付録の“A New Classification of the Nepalese Manuscripts of the Saddharmapundarikasūtra (1)”を診ていただきたい。筆者は、その結論をこれらの資料によって示唆したつもりである。判断は読者諸賢に委ねたい。

最後に1997年から2010年までの13年間の長期にわたって、この作業を陰から支え、応援して下さった関係者の方々に筆者は心からのお礼を申し上げたい。

まず、創価学会インタナショナル(SGI)会長であられる、池田大作先生に深く、深く感謝申し上げます。先生がおられなかったならば、この写本プロジェクトそのものが成立していなかったであろうし、幾多の困難を乗り越えて、予定どおりの成果を収めることができなかったかも知れない。日々の生活のなかで、幾度も弱気になり、くじけそうになった筆者を鼓舞し、一步一步前進することができた原動力は、世界平和と人類の幸福のために奔走される先生からほとばしる、折々の指針であった。このプロジェクトの結実が、先生の創り出される世界平和の潮流に乗って、世界の各地で大輪の文化の花を咲かせる種子の一粒になることを心から願うものであります。

次に、原田稔創価学会会長ならびに関係部局の皆様には厚く御礼を申し上げます。また、東洋哲学研究所の川田洋一代表理事(所長兼任)、森田康夫顧問、萩本直樹専務理事、小関博文事務局長ならびに職員の皆様には種々のご助力をいただきました。心より感謝いたし

ます。創価学会国際室の写本研究の学友である水船教義氏(東洋哲学研究所委嘱研究員)には、本書の編集・英文校正・渉外その他の分野でこれまでの3冊の著作以上の労力と時間を傾注していただき、衷心より感謝の念を表します。英文の監修をしていただいたディラン・スカダー氏に感謝いたします。また、この写本のカラーデジタル版を求めた筆者の要請に応え尽力された、ケンブリッジ大学サンスクリット写本管理責任者のR・C・ジェイミスン氏、画像サービス責任者のルース・ロング氏とスタッフの方々、またそれにかかわる手続きと連絡の任に当たられた水船氏ならびに東洋哲学研究所の大内裕家氏に心より感謝致します。また、同大学図書館とのよき関係を築いてくださった東洋哲学研究所ヨーロッパセンターのジェイミー・クレスウェル氏に衷心より謝意を表します。

2010年2月10日

東洋哲学研究所委嘱研究員

小槻 晴明